

## 通夜

部屋を貫通するオレンジの陽光は  
美を創造することはできない、と  
雄弁に物語っているように見える

彼を襲った死が  
本当にその顔を侵すことができるのか  
私には信じることができなかった

静まり返った石の祭壇の上に横たわっている  
焚きこめられた香からまっすぐに立ち上る細い煙  
失われた生命に尊厳は残っているのか

世界は考えているようだったが  
実は全ての思考を他者に委ねている  
あたかも自分が行ったかのような錯覚の中で

彼の青ざめた表情の中には  
飲み干したはずの劇薬の影は何処にもなく  
密のような、黄金の笑みが隠されていた

眠りの中に、その死を迎え入れることを拒む——  
それを成し遂げることの無意味さ・・・  
霧のような、おぼろげな誘惑に取り囲まれる

倒錯的な性が蔓延することによって滅びるがごとく  
果てしのない使役と、搾取に枯れ果てた大地で  
我々は小さな画面を凝視して寝そべっている  
いつしか砂を齧りながら・・・  
ああ、お前はそうにして死んだのだ！

私には生きるべき理由もなかったが  
死ぬべき理由もなかったし  
その上、忘れることまでが許されていた  
さらにその向こうでは  
細く煙がたなびいている

(2011.8.6)